

はじめに

私たちの身近なところで、気候変動や自然災害の多発といった地球規模の問題が語られることが多くなってきている。それは、これらの問題が、私たちの暮らしに直接つながり、深刻な影響を与えるようになったためである。

化石燃料に依存する人間の活動は、温室効果ガスによる地球温暖化等の気候変動をもたらし、大気・水質の汚染は、人間の健康を脅かしている。また、限りある鉱物・化石燃料の獲得競争は、各地の紛争の一因ともなっている。

さらに、開発や乱獲、自然に対する適切な働きかけの低下が、生物多様性に富んだ安定した生態系の維持を危うくしている。

私たちの暮らしは、経済発展や技術開発が進み、豊かで便利になった一方で、化石燃料に依存し、大量生産や大量消費に支えられる生活により地球環境に大きな負荷を与えてきた。

今、世界ではこうした時代の潮流を押しとどめ、地球規模の危機に対応していくための取組が始まっている。例えば、人類の社会経済活動によって環境にダメージを与え続けている状態に対して、社会経済活動を維持しながら環境や生物多様性をポジティブ（プラスの状態）にしようという「ネイチャーポジティブ（自然再興）」といった考え方が主流となりつつある。

こうした考え方は、私たちの地域では、昔から普段の暮らしの中で自然に行われてきたことではないだろうか。先人たちは、身近な資源を消費するだけでなく、次の世代へと引き継ぐために資源の再生産を続けてきた。また、自然に対し人の手を適度に加えることで、結果として生物多様性を維持してきた。

本市では、鈴鹿山脈を源とした森里川湖もりさとかわうみのつながりが育む多様で豊かな自然環境の中で、奥深い歴史文化を積み重ねてきた先人たちの営みに、このような自然との接し方を見ることができる。

しかし、今やこうした営みの多くは失われ、生物多様性の維持に寄与する森林が、危機的状況に陥っているのが現実である。放置された人工林の増加やシカの急増等により下層植生が衰退したことで、土砂崩れや河床の上昇等を招き、土壌保全や生物多様性の保全など森林の持つ多面的機能が損なわれている。これらは、人が森と関わらなくなったことに起因する大きな社会的問題であり、本市にも日本の森が抱える課題の縮図がみられる。

国土の 67 パーセントを森林が占める我が国は、世界有数の森林大国であるにも関わらず、戦後、森林の経済価値が下がったことにより、山間部の活力の低下や人口流出が起こり、東京などの都市部に人口が集中するという現象に拍車をかけ、今なおその状況が続いている。

こうした日本の社会構造の変化により、経済成長や利便性は飛躍的に高まり、戦後日本は国際的に見て目覚ましい発展を遂げた。しかしその一方で、他者への無関心、人間関係の希薄化、刹那的などの負の面の価値観も生まれており、価値観の変化が様々な弊害を生じさせているのではないだろうか。

我々の祖先は、時には厳しい四季の変化の中で、度重なる天災に苦しめられながらも、様々な自然の中に神が宿ると崇め、自然を畏れながらも受け入れる畏敬の念を持って接してきた。特に、木地師は全国各地で森の恵みを巧みにいかし、自然を搾取するのではなく、自然に生かされていることに感謝しながら、森と共に暮らしてきたといわれている。木を必要以上に伐採することなく、森林資源を有効に活用してきた木地師は、今、世界で求められている「ネイチャーポジティブ」の先駆者でもあると考える。不安定で先の見えない混沌とした時代に生きる私たちは、今こそ、木地師の生き方を通じて、日本社会の在り方、本当の意味での心の豊かさとは何かを学ぶべき時が来ている。

こうしたことは、林業遺産「木地師文化発祥の地 東近江市小椋谷」に認定されるとともに、鈴鹿の森^{※1}を源流とする愛知川の集水域から琵琶湖まで一つの市域で完結している本市でしか具体化できないことであると考え。源流から河口まで一つの目線で考えることができる本市だからこそ、森林を基に森里川湖のつながりをいかした総合的な政策を行うことができる。日本の森が抱える課題を解決できる場は、鈴鹿の森にあるといえる。

「東近江市だからできる、東近江市にしかできない」政策を通じ、生物多様性の保全や歴史文化の保存活用、地域活性化に取り組むことは、我が国において自然と人が共生する社会のモデルとなり得るものであると考える。そのモデルとなるべく、(仮称) 森の文化博物館 (以下「森の文化博物館」という。) の取組を進める。

本計画は、その基本的な考え方と方向性、内容について記したものである。

※1 「鈴鹿の森」

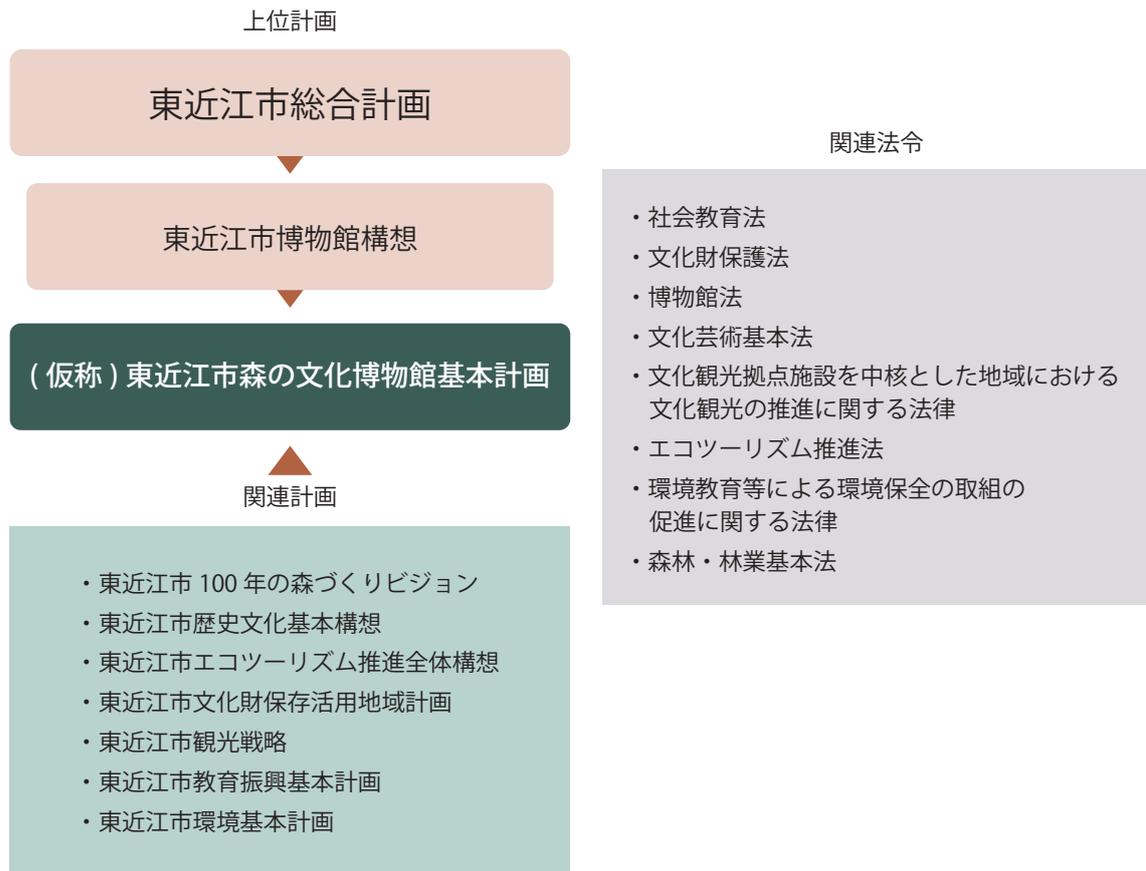
本市は、愛知川が源流から河口まで一つの水系で完結しており、愛知川の集水域は市域にほぼ含まれている。この愛知川の源流部であり、集水域に当たる鈴鹿山脈を本計画では、「鈴鹿の森」と定義する。



第1部
全体計画

I 基本計画の位置付け

本計画は、次に掲げる上位計画及び関連計画に基づいてとりまとめている。



「東近江市総合計画」は、本市のまちづくりにおける上位計画であり、将来都市像として「うらおいとにぎわいのまち 東近江市」を掲げている。その中で、本市の歴史や文化等を活用することで市民のふるさと意識を醸成して未来を創造するひをつくること、自然環境の保全・活用や資源循環型社会の構築等による循環共生型のまちづくりを進めること、地域の活力や魅力を高めて新たな地域文化の創造に取り組むことなど、環境や文化に関連する内容を基本施策としている。

令和5年3月に策定した「東近江市博物館構想」では、「人を育み、人をつなぎ、未来を創る博物館」の基本理念のもと、市立博物館の機能強化及び施設整備について示すとともに、森の文化^{※2}を守り未来へ継承するため、資料収集や調査研究、普及啓発の拠点となる博物館「森の文化博物館」の新設を位置付けている。

この構想を受けて、本計画では、森の文化博物館の整備に向け、博物館の理念や方針、事業計画等を具体化している。

森づくりに関する計画では、「東近江市100年の森づくりビジョン」（令和2年3月策定）がある。本市の100年先を見据えながらも、おおむね10年先を目指した森林づくりのあるべき姿として、森里川湖のつながりをいかした森林づくり、森林資源の有効活用、地域住民による森づくりへの参画等の実現に向けて各種施策を掲げている。このビジョンでは、森林整備や木材生産など基本的な森林・林業政策を中心としつつ、エコツーリズム、観光など森林に関わる幅広い分野についてもビジョンの対象としている。

また、東近江市歴史文化基本構想（平成29年3月策定）、東近江市エコツーリズム推進全体構想（令和4年10月策定）、東近江市文化財保存活用地域計画（令和6年3月策定）等の関連計画とも連携・調整を図っていく。

※2 「森の文化」

鈴鹿の森は、人の手の入っていない一次林（自然林）も一部あるが、大部分は人の手の入った二次林である。この鈴鹿の森では、人々が古くから森という豊かな自然の恵みを利活用した暮らしや生業、その中で育まれた地域ごとの祭りや神事など歴史文化が生まれてきた。また、本市ならではの政所茶の生産技術や木地師文化は、現在も受け継がれている。

本計画では、鈴鹿の森と人が共生し形成された歴史文化を総じて「森の文化」と定義する。

II 鈴鹿の森と森の文化博物館

1 鈴鹿の森のポテンシャル

(1) 私たちと鈴鹿の森

■東近江市の森里川湖の源流部

本市は、市域の56パーセントを森林が占めている。この森林を源流とし、東は鈴鹿山脈から西は琵琶湖まで、愛知川という一つの水系でつながり、南西部を流れる日野川とともに里に広がる田畑を潤し、琵琶湖に注いでいる。このように、源流から河口まで一つの水系が市域で完結する本市は、森里川湖のつながりが育む多様で豊かな自然資源を有するまちとなっている。

こうした自然的、地理的条件の中で、先人たちは、森林を利用し、自然の中で奥深い歴史文化や伝統を築いてきた。森では、全国に誇る政所茶や木地師文化^{※3}を育み、里では肥沃な農地での米づくりをはじめ、豊かな農水産物による独自の食文化を発展させてきた。また、湿潤な気候により早くから麻織物などの特産品が生まれ、それを五個荘近江商人が全国に広め、地域に発展をもたらした。湖辺では、集落内に水路を張り巡らし、水が人々の生活を支えてきた。先人たちはこのように森里川湖のつながりの中に暮らしてきた。

この愛知川水系の源流部に当たるのが鈴鹿の森である。そして、鈴鹿の森は水域、生態系の源であるだけでなく、私たちの生活を支える基盤の源でもある。

■鈴鹿の森の自然と人

鈴鹿の森は、多種多様な植生を有し、生物多様性に富む国内有数の地域である。それは、動植物の分布上、東日本と西日本の境界部に位置し、日本海側気候と太平洋側気候の両方の要素を含むことや地質が多様なことなど、鈴鹿の森ならではの要因によるものである。さらに、山麓部の標高が200メートル程度で、山頂部は1,000メートルを超える山稜が連なるという標高差によってもたらされる気象条件の変化で、暖温帯、中間温帯、冷温帯等を代表する植物が生育しており、これも鈴鹿の森の生物多様性をもたらしてくれている。

こうした環境に加え、鈴鹿の森では、古くから人々が暮らし、様々な自然資源を持続的に利用してきたことも、生物多様性の維持に大きく寄与してきた。人の手が適度

※3 「木地師文化」

木地師は、一般的に、轆轤と呼ばれる工具を使って椀や盆等の木製品（木地）の製作に従事する職人・職能集団である。原木を求めて山々を自由に移動し、小椋谷に隠棲された惟喬親王を木地師の職祖と仰ぐ伝承を持っていた。近世以降、蛭谷や君ヶ畑は、木地師の保護と統制を目的とした「氏子かり」という制度の本拠地（根源地といわれる）となり、この制度は明治初期まで続いていた。

このような、惟喬親王を職祖と仰ぐ伝承、小椋谷を木地師の根源地とし、全国各地の木地師を統括するシステムなどの総体を本市では「木地師文化」と定義する。

本市の木地師に関する資料群や建造物、道具類は「木地師文化発祥の地 東近江市小椋谷」として、一般社団法人日本森林学会から平成30年度に林業遺産（NO.33）に認定されている。

に加わることで、森は多様な樹種を維持し、それを糧にして多種多様な生き物が生息し、安定した生態系が保持されてきた。その生態系ピラミッドの頂点にはイヌワシとクマタカがいる。かつて、この両種が生息できたのは、鈴鹿の森が類まれな多様性と豊かさを有していたことを証明している。

■鈴鹿の森で育まれた木地師文化をはじめとする森の文化

鈴鹿の森では、動植物だけではなく、その恵みのもとで古くから人が暮らし、小椋谷を根源地とする木地師文化が育まれた。木地師とは、山に入って木を伐り、ろくろや鉋^{かな}を用いて椀や盆などの生活用具を製作する職人のことである。小椋谷の蛭谷町、君ヶ畑町には、全国の木地師を巡廻した記録である「氏子狩帳^{うじこかりちょう}」が残されている。これは、全国の木地師を蛭谷、君ヶ畑の神社の氏子とし、鑑札や神札等を発行することで、木地師とその社会の保護を担うものだった。また、かつて鈴鹿の森では、人々の生業の一つとして樹木を伐採し、薪炭製造業や林業が盛んに行われていた。このような森の生業によって、森には適度に人の手が加わり、それが豊かな森林資源の保全に寄与してきた。

さらに、傾斜地で寒暖差が大きく、日照時間が短い山里で栽培される政所茶は、農薬を使わず有機肥料を使い、丁寧に手摘みで収穫されてきた。この茶栽培の伝統や森と生きる知恵は、「在来種の無農薬栽培と手摘みの政所茶」として今も継承されている。

そして、鈴鹿の森の各川筋の谷間には、このような生業のもとに森と共に暮らした人々と自然が作り上げた山村景観が、今なお色濃く残されており、平成27年度には、「永源寺と奥永源寺の山村景観」が日本遺産に認定されている。

■鈴鹿の森の変化

鈴鹿の森と人との関係は、一見、昔から変わらないように見えるが、実際には社会情勢とともに大きく変化している。

森では、戦後復興の過程で建材として樹木が大量に伐り出され、荒廃が進んだ。その後、スギやヒノキなどの植林が進められ、人工林の割合が増加し、天然林が減少していく。また、高度経済成長やエネルギー革命による薪炭需要の激減、外国産材の輸入自由化によって国産材の需要が減退し、森林の経済価値が下がっていった。結果、林業のような一次産業の衰退とともに、人々は都市部に雇用を求め移り住んでいった。こうした社会変化によって、森に対する人々の関心は薄れ、山間部では過疎化や少子高齢化が進行し、今まで守り受け継がれてきた伝統や歴史文化が失われつつある。

さらに、管理の行き届かない森林の増加や地球温暖化等を要因とした異常気象により、表土の流出、土砂の堆積による河床の上昇や地形の変化等が生じた結果、生物多様性の劣化や生息の場を失った野生鳥獣による獣害等の問題が発生するようになっていく。これらの社会問題は、我々とは無関係な遠いところで起こっている事象が原因のように感じるが、実は、身近な森への関心が薄れていることが大きな要因の一つで

あると言え、同様のことが、鈴鹿の森に限らず、世界や国土全体で起きている。

今、私たちは、鈴鹿の森が提起する様々な諸問題に真摯に向き合い、適正な森林管理や生物多様性の保全、カーボンニュートラルなどに向けた取組を進め、持続可能な社会を実現していく必要がある。

そして、鈴鹿の森で様々な取組を進め、先人たちからの貴重な地域資源^{※4}を次世代へ継承していくことは、世界や国土全体の課題解決に寄与するものである。

【東近江市と鈴鹿の森】



出典：国土地理院ウェブサイト (<https://maps.gsi.go.jp/vector/#13.958/35.129969/136.360819/?ls=vpale&disp=1&d=1>)

(2) 求められる市の責務

■市の責務

森と人が共生し、あゆみ続けてきた森の国「日本」において、鈴鹿の森は、日本全体の縮図ともいえる。特に愛知川上流部の御池川周辺は、本市の水源の森であり、木地師文化をはじめとする歴史文化が育まれた場所である。鈴鹿の森を守ることによって、流域全体の環境保全を図り、持続可能な東近江市の構築、自然と共存した歴史文化を重視したまちづくりにつなげる必要がある。

森と人の共生を目指した取組を進めることによって生物多様性に富み、土砂災害、水害等の災害が少ないまちとなり、人々の暮らしや地域を維持発展させていくことに

※4 「地域資源」

地域には、自然や歴史文化、人材など有形無形の様々な自然資源や文化資源（人的資源、人工資源、社会資源等）が存在する。このうち、地域の独自性が高く、地域内で有機的に連鎖し、他の地域には供給できないものなど、地域的な特性が顕著なもので、独特の価値を持つもの、地域の特産物やその製法、観光資源、地域特有の自然や歴史文化等、特定の地域内で人々の生活に欠かすことができない貴重な資源を「地域資源」と定義する。

つながる。また、森林整備により大気中のCO₂を減らし、自然と調和した美しいまちにもつながるといえる。本市の森を基軸とした取組が目指すものは、まさに、このような将来の本市の姿を描く基本となるものであり、東近江市民憲章に掲げる『夢と希望に満ちた活気あふれる豊かなまち』の実現に向けて、東近江モデルとも言うべき取組を実践できるのは、鈴鹿の森から琵琶湖まで流域全体がひとつの水系でつながる本市にしかできないと考える。

変貌する森に対応した取組を進め、私たちと鈴鹿の森の関係を再認識、再構築し、貴重な地域資源を未来に引き継ぐ責務がある。

■博物館のもつ“ちから”の活用

鈴鹿の森を通じて自然と人の関係について再考し、持続可能な社会づくりの一つのモデルとして、全国、世界の共通する課題の解決に寄与する循環を創出していく取組を進めていくこととする。そして、この取組を具現化するシンボルとして、「鈴鹿の森の自然と歴史文化」をテーマとした森の文化博物館を整備する。

森の文化博物館の整備に当たっては、新しい博物館の在り方を追求していく。これまでの博物館の主な役割である資料の収集、保存、展示、調査研究だけでなく、博物館がもつ情報を共有し、人々が博物館を利用して自ら情報を発信し、共感と共通理解を醸成することで、持続可能な地球環境の維持、活力ある社会づくり、健康で心豊かな生活に貢献することを目指す。また、生涯学習・社会教育の拠点として多世代の人々をつなぎ、学びを提供するとともに、未来に生きる世代を育てていく。さらに博物館は、その幅広い機能をいかして地域や社会の課題の解決に貢献していく。

森の文化博物館の整備は、鈴鹿の森における森と人の関係づくりに向けた第一歩である。かつて鈴鹿の森を根源地とする木地師の全国的なネットワークが形成されたように、森と人の共生関係を創り出す取組をスタートする。

2 森の文化博物館とは

(1) 多様な地域資源と一体となった博物館

鈴鹿の森には、多様な地域資源が存在する。中でも、御池川の谷筋周辺には、クマタカを頂点とした森林生態系ピラミッドが存在し、木地師文化や山の暮らし、伝統行事、政所茶づくり等、鈴鹿の森を代表する地域資源が集まっている。鈴鹿の森は、そうした魅力が凝縮した地域であり、自然環境、歴史、民俗など広い分野にまたがり、森の文化とその価値を構成している。

愛知川の上流部、鈴鹿山脈の溪谷を流れる御池川周辺は、石灰岩をはじめ、砂岩や泥岩など多様な地質に支えられ、多彩な動植物が生息・生育するのに適した環境であったことから、先人は、この地に住居を構え、自然と共に暮らし、貴重な山村文化を育んできた。

かつては、^{よもぎだに}蓬谷鉦山や数多くの炭焼き窯があり、鈴鹿 10 座の日本コバや天狗堂にはモミ林やブナ林が生育するなど、豊富な森林資源に恵まれている。また、政所茶で知られる政所町、惟喬親王伝承が残り、江戸時代に全国の木地師を統括した神社や寺院がある蛭谷町、君ヶ畑町など、現在も森と人の密接な関係が息づいている地域である。

鈴鹿の森は、人々が森林資源を適正に管理してきた場所であり、森と人の共生を知るルーツを示す地域資源が凝縮している。森、川、動植物に囲まれたこの地こそが、森と人の共生を色濃く表している地と考える。

よって、本市では、鈴鹿の森の様々な地域資源が育まれたフィールド全体を「森の文化博物館」と位置付ける。魅力ある地域資源のつながりをいかした多彩な事業を、施設の中にとどまらず鈴鹿の森全体で幅広く展開し、本物の自然や文化に触れることができる博物館を目指す。豊かな自然や歴史文化が培われ、人々の生きる知恵が随所に溢れる「森の文化博物館」の中で、森と人、そして地域社会の関係を見つめ直す取組を推進する。

さらに、持続可能な東近江市を目指し、森の重要性を発信する場として、様々な活動に取り組み、自然と人の共生や森林文化を学び、広大な鈴鹿の森がもたらす恵みに感謝し、森と人の共生関係の再構築につながる博物館を目指す。

【森の文化博物館の位置】



【多様な地域資源のイメージ】



(2) 森と人とのつながりを取り戻す活動拠点

多様な地域資源で構成される森の文化博物館では、その広大なフィールドをいかし、鈴鹿の森の豊かな自然や奥深い歴史文化について多くの人々が興味を持つことのできるような取組を行う。また、地域資源について、単体で発信するだけでなく、相互を連携させることで更に奥深い学びを得ることができ、魅力が高まるものと考えられる。

そのため、多様な地域資源を相互に関連付け、理解を深める機能を有する総合的な学びの場となる活動拠点を設け、展示、体験、学習、調査研究、さらにはエコツーリズムや関係機関との連携等を通じて、地域資源へ誘^{いざな}う取組を創出する。また、活動拠点には、研修機能や宿泊機能をもつ施設を検討するなど、鈴鹿の森の自然や歴史文化を深く学ぶ環境を整えていく。

多様な自然と奥深い歴史文化に彩られる地域資源があるフィールドを構成要素とする森の文化博物館は、活動拠点がその魅力を発信、紹介することで、豊かな森の文化を余すことなく表出させる、野外空間と一体となった新たな形の博物館であり、森と人との関わり方を見つめ直し、森と人とのつながりを取り戻す多様な事業を展開する。

(3) 社会や地域の課題に取り組む博物館

森の文化博物館は、持続可能な社会づくりの一つのモデルとして、森と人との関係について考え、社会や地域、ひいては全国、世界に共通する課題の解決に寄与することを目指す。地域住民をはじめとした多様な人々が博物館の活動に参加・協働することにより、様々な価値観や課題解決方法を共有し、未来の森の文化を創出する取組を進めていく。

【目指す博物館像】



III 基本理念と基本方針

1 基本理念

東近江市博物館構想及び第Ⅱ章で示した森の文化博物館の在り方や博物館像を踏まえて、次の基本理念を設定する。

森に学び 共に生きる

森の文化博物館では、森里川湖が一つの水系でつながる本市の特色をいかした事業や本市博物館群と連携事業を実施することにより、地域、人、地域資源が一体となった活動を進め、鈴鹿の森の魅力や価値を見つめ直し、未来に向けて森と人が共生する社会を創出していく。

2 基本方針

基本理念に沿って、次のような基本方針のもとに活動する。

(1) 鈴鹿の森の自然と木地師文化をはじめとする歴史文化の調査研究、資料の収集・保存を進め、継承と活用を図る。

鈴鹿の森の豊かな自然と木地師文化をはじめとする歴史文化に関する調査研究や資料の収集保存を持続的に進める。これらをいかした展示公開や交流事業を通して情報を発信し、資料を次世代に継承していく。

(2) 地域資源を活用した様々な体験・体感を通じて、鈴鹿の森や森の文化への理解を深める。

鈴鹿の森を訪れる人々が地域資源を活用した様々な体験・体感を通じて、森の魅力と大切さを学ぶ場とする。森の文化博物館の整備をきっかけに、自然環境の保全や地域文化の継承に向けた活動を通して、意識を醸成する。

(3) 地域資源の魅力を共有し、地域に一体感を創出する。

多様な自然環境に囲まれ、木地師文化と深い関係がある鈴鹿の森の特性をいかし、「鈴鹿の森の自然と歴史文化」の魅力や価値を共有し、新たな学習活動などの交流機会を作り出し、地域と人、人と人、人と資源等の一体感を創出する。

(4) 森の文化の社会的価値を再発見し、持続可能な社会の創り手を育成する。

研究機関や教育機関との連携により森林の新たな価値を創造するとともに、森の文化の重要性を再発見し、多様で豊かな地域資源をいかした森と人の共生社会を目指し、教育、文化、産業など様々な領域において持続可能な社会の創り手となる人材を育成する。



奥永源寺の山村景観

IV 事業活動計画

1 事業活動計画の基本的な考え方

森の文化博物館では、森の多面的な機能をいかし、鈴鹿の森と市民・来訪者をつなぐための多様な事業を展開する。

博物館事業の基礎となる地域資源に関する調査研究や収集保存は、市民・団体・専門家等と連携し、持続的に行っていく。また、鈴鹿の森の価値や魅力を知る学習、体験事業に取り組み、人と人をつなぐ交流事業へと広げ、地域活性化、未来社会を担う人づくりへとつなげる。

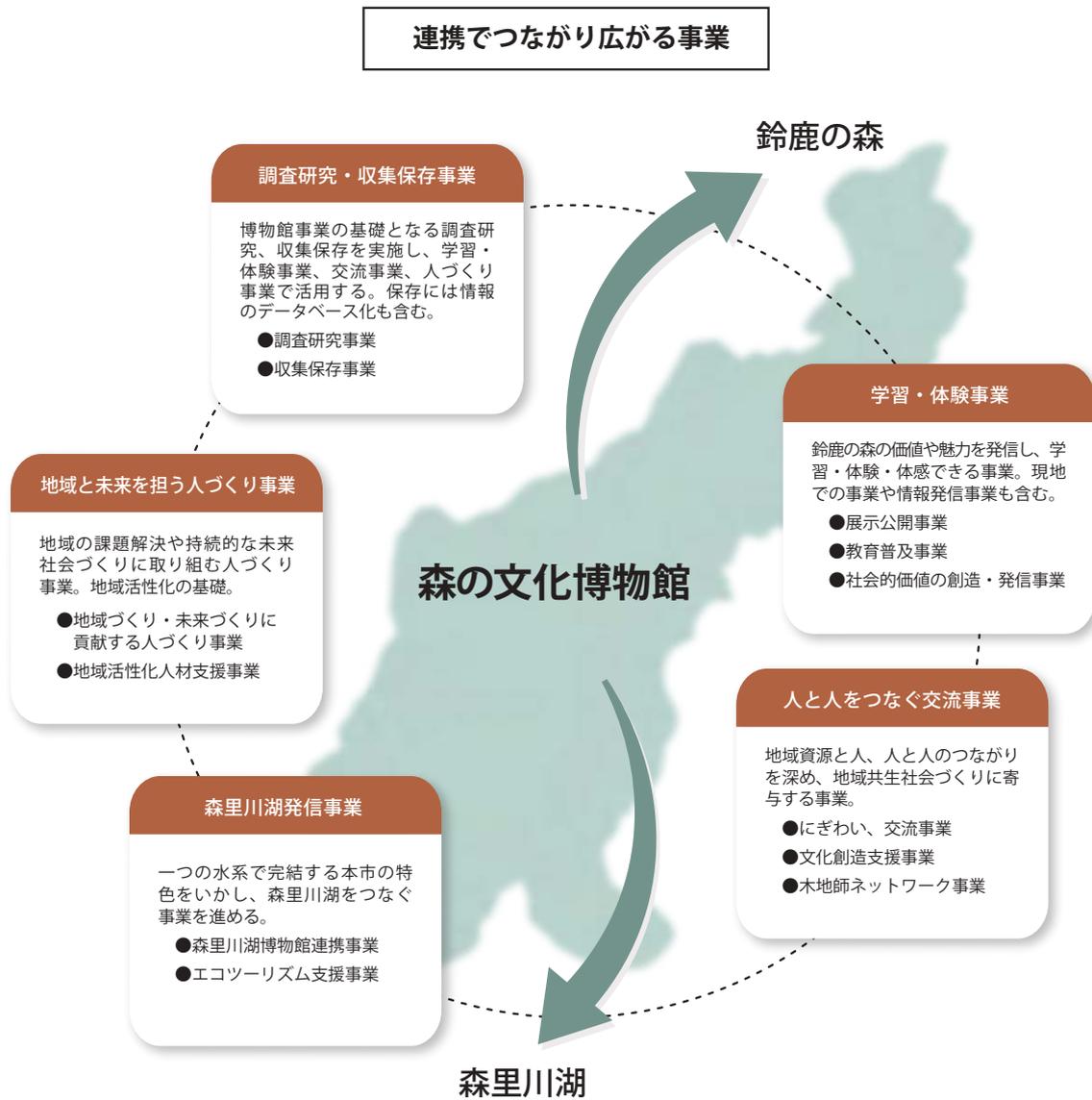
これらの取組により、森の文化博物館の発展と循環をもたらす事業構造の基礎を築いていく。

併せて、鈴鹿山脈から琵琶湖まで一つの水系でつながる本市の特色をいかした森里川湖をつなぐ事業を推進する。また、まちづくり、教育、環境、林業等の関連する分野の事業との連携や支援等を通じて、地域課題、環境問題等の解決に寄与していく。

鈴鹿の森では、これまで国や県の研究機関や高等教育機関等と連携し、地域資源に関する調査研究が進められてきた。また、民間事業者やNPO団体等の活動も盛んに行われており、多様な事業を展開するポテンシャルを秘めている。今後もこれらの取組を発展させるため、地域住民や地域団体、活動団体、周辺自治体、関連機関等と様々な形で連携を図る。

これらの事業のつながりと広がりによって、森の文化博物館は鈴鹿の森のシンボルとなり、地域全体の振興や自然と共生した未来社会づくりにつなげる。

【事業の体系・構成】



2 調査研究・収集保存事業

森の文化博物館の基礎となる事業として、調査研究や収集保存に取り組み、その成果を基に、学習・体験事業をはじめ、人と人をつなぐ交流事業や地域と未来を担う人づくり事業へとつないでいく。

(1) 調査研究事業

鈴鹿の森の自然と歴史文化に関する以下のような領域の調査研究を持続的に推進する。調査研究は、市民や地域団体、専門家、博物館、研究機関、教育機関等と連携し、幅広く開かれた取組として進めていく。

<調査研究の対象領域・テーマ>

- ① 鈴鹿の森の自然
 - ・鈴鹿の森の自然史
 - ・鈴鹿の森の動植物、生態系
 - ・森の資源の有効活用、地域づくり、産業振興
- ② 鈴鹿の森の歴史文化
 - ・鈴鹿の森の歴史、民俗
 - ・鈴鹿の森の山村景観
 - ・山村の暮らしと民俗文化
- ③ 木地師文化
 - ・惟喬親王伝承と木地師統括制度
 - ・全国の木地師関連資料
 - ・全国の木地師の伝承、現況
 - ・木工品の素材、ろくろ技術、ろくろの道具等

<調査研究成果の公開>

- ・博物館紀要の発行
- ・講演会の実施

(2) 収集保存事業

森の文化博物館の活動の基盤となる資料や情報を収集・記録し、適切な保存環境や収蔵設備を整備し、貴重な資料を保存管理する。また、無形資料や自然資料、データ・情報なども含め、デジタルアーカイブ化を図る。さらに、地域資源の適切な維持管理に寄与していく。

- ① 調査研究の成果に基づく収集計画の立案・実施
 - ・ 木地師文化、山村の暮らし等、地域に関する資料の収集
 - ・ 鈴鹿の森の自然関連資料、情報の収集
 - ・ 無形民俗文化財の映像記録化
- ② 寄贈や寄託等の資料の評価と受入れ
 - ・ 地域資料の寄贈や寄託等の受入れ
 - ・ 木地師関連資料の寄贈や寄託等の受入れ
- ③ 資料の整理とデジタルアーカイブ化
 - ・ 所蔵資料の整理とデジタルアーカイブ化
 - ・ 木地師関連資料の整理とデジタルアーカイブ化
- ④ 収蔵環境が整備された収蔵施設での保存・管理
 - ・ 収蔵庫の整備と保管、適切な保存処置の実施
- ⑤ 地域資源の適切な維持管理
 - ・ 自然景観及び生物多様性の保全
 - ・ 地域資源、地域の資料館等の維持管理への助言、支援

3 学習・体験事業

鈴鹿の森の自然と歴史文化の価値や魅力を発信する展示を行い、市民や来訪者が学習・体験・体感できる事業を行う。これらの事業が人と人をつなぐ交流や地域と未来を担う人づくりの原動力となる。

(1) 展示公開事業

森の文化博物館では、様々な地域資源を展示物と見立てる。また、拠点施設では、鈴鹿の森の自然と歴史文化、木地師文化等について、調査研究の成果をもとに資料や情報を分かりやすく紹介し、地域や未来社会を考えるきっかけとなる展示をすとともに、広く情報発信を行う。

- ① 「鈴鹿の森の自然と歴史文化」をテーマとした展示
 - ・ テーマを構成する「自然」「歴史文化」「木地師文化」などの領域に関して、総合的・体系的に紹介
 - ・ 地域資源と拠点施設を結び付けた展示情報
- ② 拠点施設における常設展示と企画展示
 - ・ 持続可能な社会の実現の一助となるストーリー性のある常設展示
 - ・ 常設展示とつながり、展示全体をより魅力的なものとしていく可変的な企画展示
- ③ 拠点施設の資料貸出
 - ・ 貸出規定（貸出基準・条件）に基づく適切な資料の貸出
- ④ インターネット等による情報発信
 - ・ ホームページやミュージアムサイト、SNS等の効果的な活用
 - ・ 鈴鹿の森の情報やイベント情報等の発信

※展示計画の詳細については、「第2部 活動拠点計画 第III章展示計画」に記述している。

(2) 教育普及事業

市民や子どもたちなどが森の文化博物館を訪れ、鈴鹿の森の自然と歴史文化に触れる機会や学ぶ環境をつくる。そして、博物館事業に参画することで、地域社会が抱える課題の解決につながる一助とする。

- ① 地域学習・環境教育の充実
 - ・各種学校や企業等における講座や研修の実施
 - ・滋賀県が実施する森林環境学習事業との連携
 - ・市内中学校の職場体験受入れ（拠点施設、工房、ガイドなど）
- ② 生涯学習の支援
 - ・コミュニティセンター等で開催される生涯学習事業の支援
 - ・自治会等の生涯学習事業の支援
- ③ 博物館事業への市民参画
 - ・市民共同研究活動（市民による調査研究と資料収集、活動発表等）
 - ・サポーターによる博物館活動（資料収集、調査、撮影、標本作製等）

(3) 社会的価値の創造・発信事業

国内外で森づくりに取り組む団体等とネットワークを形成するとともに、研究機関や高等教育機関等による鈴鹿の森の森林資源に関する調査研究や資源活用など新たな森林の可能性の創出に向けた取組等と連携し、森の社会的価値を創造するとともにその価値を発信する。

- ① 森の文化をテーマとする発信
 - ・木工作品の紹介、展示販売
 - ・アーティスト・イン・レジデンス事業
 - ・鈴鹿の森の食文化の紹介と継承
- ② 環境保全に関する発信
 - ・環境保全の交流会
 - ・植樹ワークショップ
- ③ 森林資源を活用した新たな取組
 - ・研究機関や高等教育機関等の誘致
 - ・森林資源に関する調査研究
 - ・森林資源を活用した事業の推進

4 人と人をつなぐ交流事業

(1) にぎわい、交流事業

誰もが森の文化を体験・体感できるよう、鈴鹿の森独自の取組・イベントを企画し、鈴鹿の森の来訪者、博物館活動への参加者、拠点施設の利用者、森の研究者等多くの人がつながり、地域とつながることにより、鈴鹿の森ににぎわいと交流を生み出し、文化の創造と地域活性化につながる活動へとつなぐ。

- ① 森の文化博物館を利用したにぎわいと地域の交流の場の創出
 - ・各種ワークショップやライブイベントなどの開催
 - ・森の文化や木の文化に触れて楽しみ、学ぶことのできる体験型イベント
 - ・宿泊施設や研修施設、カフェ、ショップなどの設置
- ② 研究交流事業の実施
 - ・自然環境、環境教育等の研究交流
 - ・森林文化、歴史・民俗、木地師文化に関する研究交流
- ③ 観光施設等との連携
 - ・道の駅、神社仏閣、飲食店など市内の観光施設・文化施設との連携による周遊性の向上
 - ・鈴鹿の森の自然や木地師文化等に関する地域ストーリーの創造と周遊ルートの整備

(2) 文化創造支援事業

林業振興や環境政策など幅広い分野について団体や民間企業など多機関と連携・協力する。多くの人々が森と共生する新しい価値観に気づき、新たな生活様式や文化を創造する取組に一步踏み出すきっかけとなるように、鈴鹿の森の自然と歴史文化の魅力や価値を再認識し、活用する新たな事業の創出を支援する。

- ① 新しい生活様式の創造事業
 - ・地域産木材を利活用した創造プログラム
 - ・地元の人々による森の資源を活用した暮らし（山菜、加工食品、染物等）の提案の支援
 - ・森林資源を活用した新たな文化の創造
- ② 森林文化普及事業
 - ・林業活性化による地域振興の取組と連携事業
 - ・木の文化に関する職人や作家、企業との交流
 - ・鈴鹿の森とつながるプロジェクト（炭焼き窯ワークショップ、GPSを利用した鉱山跡や炭焼き窯跡、巨樹・巨木のマップづくり、周遊ルートづくりなど）

(3) 木地師ネットワーク事業

小椋谷を根源地として歴史的に形成されてきた木地師ネットワークは、社会的な背景から失われつつあることから、木地師文化を再認識し、情報発信等を通じて木地師ネットワークの再構築・強化を図る。

- ① 木地師文化の情報発信
 - ・木地師やろくろ技術にまつわる物づくりの原点を紹介
 - ・木地師の作品の紹介
 - ・木地師に関するWEBサイト、SNSの構築・運営、普及のための小冊子、研究誌・季刊誌発行等
- ② 木地師ネットワークの再構築・強化
 - ・木地師文化フォーラムの開催
 - ・全国の木地師、木地師集落のネットワークのデータベース化



木地を挽く様子

5 地域と未来を担う人づくり事業

鈴鹿の森の価値を再認識し、地域の持続可能な社会を目指し、様々な課題解決の取組を担う人、参加する人、支援する人など、地域と未来を担う多様な人づくりに取り組む。

(1) 地域づくり・未来づくりに貢献する人づくり事業

地域資源の魅力や価値を伝え、自然や歴史文化を次世代に継承する取組など質の高い事業を持続的に行い、地域づくり・森づくりを担う人を育て、さらに参加者や支援者まで、人づくりに取り組む。

- ① 地域人材の育成
 - ・「動植物、歴史文化、ものづくり」など、地域マイスター（各分野の達人）の発掘、育成
- ② 次世代の森林づくりの担い手育成支援
 - ・森林の専門家養成事業支援
 - ・森林環境学習事業
- ③ 関連人材の育成
 - ・博物館会員組織の立ち上げと運用
 - ・サポーター体制の構築と充実
 - ・博物館実習の実施
 - ・インターンシップの受入れ
 - ・移住検討者向けの情報提供
 - ・NFTをはじめとするWeb3の技術を活用した関係人口の創出



森林環境学習

(2) 地域活性化人材支援事業

地域の特産品等のブランド化や鈴鹿の森の自然と歴史文化に共感する取組は地域を強くし、それらに関わる人材を増やすことは地域の力になることから、本市の知名度向上や地域のブランド化、地域の活性化につながる取組を支援し、これからの地域を担う人材の育成に取り組む。

- ① 地域ブランドを確立する地域活動組織との連携事業
 - ・ 政所茶カフェ、販売
 - ・ 地域製品の紹介、販売
- ② 地域の人材と連携した地域活性化プログラムの支援
 - ・ 森の文化に関連する事業のスタートアップ支援
 - ・ エコツーリズムの推進体制づくりの支援
 - ・ 博物館のホームページを活用した広報活動の支援
- ③ 特別感を演出する事業
 - ・ 博物館の活用可能性を広げ、地域活性化に資する、拠点施設や関連施設の貸出（企業の社内研修やイベントでの利用、移築古民家の活用）



政所茶の茶摘み風景

6 森里川湖発信事業

森だけではなく、本市の特色である森里川湖の一体的なつながりをいかした取組を推進することにより、森の文化博物館の社会的価値が高まり、鈴鹿の森の大切さなど森里川湖がつながるこの地でしか体感できない価値を創造し、発信する。

(1) 森里川湖博物館連携事業

森の文化博物館の整備により、市内の博物館ネットワークが森里川湖を共通としたテーマでつながることができるようになる。近江商人博物館や能登川博物館などの博物館と連携し、森里川湖のつながりをいかした取組を進める。

- ① 「森里川湖」を共通テーマとした博物館連携事業
 - ・ 展示や講座、現地体験ツアー等の実施
- ② 共同調査・研究
 - ・ 市民協力による生き物調査
 - ・ 森里川湖の地域ごとの歴史・文化・民俗等の比較研究
- ③ 愛知川再生プロジェクト
 - ・ 愛知川の生態系調査
 - ・ 愛知川の保全や再生に関わる事業との連携、濁水のメカニズム調査研究
- ④ 源流から河口までの交流
 - ・ 森里川湖のつながり体験プログラム

(2) エコツーリズム支援事業

自然環境や歴史文化など地域固有の資源をベースとしたエコツアーへの支援やエコツーリズムガイドの養成、森の魅力発信や森里川湖関連事業との連携により市内のエコツアーに誘うなど、鈴鹿山脈から琵琶湖まで森里川湖でつながる地の利をいかしたエコツーリズムを支援する。

- ① 森里川湖エコツアーの実践支援
 - ・ 森里川湖のつながりを地域資源としたエコツアーの情報発信と実践支援
- ② エコツーリズムガイドの養成
 - ・ 森の文化博物館を活用したエコツーリズムガイド養成講座の開催とフォローアップ講習の実施
- ③ 拠点施設における森の魅力の情報発信
 - ・ 森里川湖のつながりの原点である、鈴鹿の森の重要性を展示紹介
 - ・ 森の文化博物館の周遊ルートや見どころ等の情報をガイドブックやガイドマップで提供

- ・ 鈴鹿の森の現況を映像で紹介
- ④ 森里川湖関連事業との連携
- ・ 市内で開催される森里川湖のつながりを体感できる取組と連携することにより、更に深くその魅力を知ることができるエコツアーに誘う。



エコツアーの様子

V 森の文化博物館整備計画

1 森の文化博物館整備の基本的な考え方

本市は市域の56パーセントを森林が占め、鈴鹿の森から琵琶湖まで一つの水系でつながり、森・里・川・湖といった多様な姿を見せる自然豊かなまちである。鈴鹿の森は、水源の森として貴重な地域であり、その変容は里・川・湖の流域全体に大きな影響を及ぼすと考える。

森の文化博物館は、鈴鹿の森の源流部において、生物多様性が富むこと、森の恵みをいかした人々の営みが行われていることの両要素が重なる地域に位置している。

本市で策定している「東近江市100年の森づくりビジョン」や「東近江市エコツーリズム推進全体構想」では、原始的な自然を保護するのではなく、自然と人が関わり合うことによる持続的な保全と活用の両立を位置付けており、地域や多様な主体が本来の森のあり方について考え、森の大切さに気付くことで行動を起こすことにつながると考える。

また、本市では、幼少期に里山^{※5}に触れる「里山保育」に取り組んでいる。幼少期の体験は心に残り、豊かな心や地域への愛着心を育み、将来、里山や森と人をつなぐ原動力になる可能性があることから、子どもの頃に森での原体験を身につけることが重要と考える。

さらに、森を取り巻く環境や課題は、常に変化していくものである。これまで森で育まれた文化を継承するとともに、時世の変化に合わせて森と人とのつながりを昇華させることで、安定した持続可能な森になると考える。森の文化博物館は森の変化を的確に捉え、より良い姿へ導く必要がある。

そのためには、森の文化博物館を訪れる来訪者が鈴鹿の森の地域資源を観察し、学び、体験・体感することで、森の魅力や価値を再認識し、今、鈴鹿の森に何が必要か、地域が一体となって考え行動し、鈴鹿の森の魅力を高めていく必要があると考える。

鈴鹿の森の魅力が凝縮した地域に位置する森の文化博物館は、これらの考え方を踏まえ、森と人の共生社会を目指した整備を行う。また、多様な主体が地域資源を掘り起こし、磨き上げることで、自然と歴史文化に満ち溢れた博物館を創出する。

2 森の文化博物館の整備

フィールドで行う学習・体験事業や人と人をつなぐ交流事業等では、地域資源の活用を進め、来訪者や市民が鈴鹿の森の自然や奥深い歴史文化を体験、体感し、鈴鹿の森の価値に理解を深めた人づくりや人と人、人と地域をつなぐ交流を行うとともに、

※5 「里山」

鈴鹿の森に位置する集落では、周辺の農地や草地、森などの豊かな自然資源を適切に利用しながら人が暮らしてきた。本計画では、山村での暮らしや生業に密接な関わりがある集落を含む森や農地等のまとまりを「里山」と定義する。

地域資源の保全・保存と再生を図る。

これらの事業を実施するため、地域資源の魅力の整理や活動拠点と各集落等をつなぐ周遊性を高めるルートの設定、案内板、付帯施設等のハード整備を進め、あわせて鈴鹿の森の価値を理解し、未来に向けた行動を促す人づくり、地域づくり等のソフト面を充実させ、森の文化博物館の基盤整備を行う。

また、整備に当たっては、初めて訪れた人から何度も訪れた人まで、訪れる度に新たな発見ができる場所となるよう整備を進めていく。

(1) 地域資源の魅力を高める整備

地域資源を展示物と捉え、来訪者がその魅力を感じ、何度でも訪れたいと思うことができる整備を行う。そのため、地域資源の特色を紹介する解説標識を設置するなど地域資源の魅力を高める整備を図る。

(2) 活動拠点と地域資源の周遊性と安全性を高める整備

活動拠点から各集落や道の駅、神社仏閣等の地域資源を歩いて巡るルートを設定し、セルフガイドやエコツアーの利用も合わせ、自然や歴史文化の体感、体験につなげる。設定したルートが登山道の場合は、新たな登山道整備や修復、案内板を設置するなど、活動拠点から地域資源の周遊性と安全性を高める整備を図る。

特に活動拠点と道の駅奥永源寺溪流の里との連携は重要であるため、機能分担や機能強化について検討を進める。

(3) 付帯施設整備

来訪者が安心して地域資源を訪れ、路上駐車やし尿問題等による地域への迷惑行為や環境破壊が発生しないよう、駐車場や屋外トイレなどの付帯施設の整備に努めるとともに、その対策を検討する。

(4) アクセスの整備

来訪者の利便性の向上を図るため、公共交通機関の充実や快適な道路環境整備に努めるとともに、来館者のニーズに合わせた最適な交通手段を検討する。また、幹線道路に博物館への誘導看板を設置し、遠方からの来訪者に対応した環境整備を図る。

(5) 地域づくりを担う人材や組織の体制整備

本市の森里川湖に広がる地域資源の魅力や価値を余すことなく伝え、地域資源を次世代に継承するため、エコツーリズムを推進するとともに、エコツーリズムガイドの育成支援により、地域づくりを担う人材育成を図る。また、地域づくりや地域資源を活用した取組を行っている自治会や地域の諸団体、事業者等とのつながりを図るネッ

ネットワーク組織を構築し、博物館活動を推進する体制整備を図る。

次のような組織や団体等との連携を想定している。

- ・エコツーリズム実施団体
- ・環境保全団体
- ・文化財保護団体
- ・民間企業
- ・教育機関
- ・研究機関

【森の文化博物館整備概念図】



出典：国土地理院ウェブサイト (<https://maps.gsi.go.jp/vector/#11/35.132989/136.362594/&ls=vpale&disp=1&d=l>)

VI 管理運営計画

1 管理運営の基本的な考え方

森の文化博物館は、豊かな地域資源を有する広大なフィールドとそれらを活用する活動拠点が一体となった特色ある博物館として管理運営していく。多様な博物館活動により、来訪者が鈴鹿の森や森の文化に魅力を感じるとともに、関わり合いを持てるようにすることで、自然と共生した地域の人々の暮らしや生業の価値を再認識し、郷土の誇りと愛着を高める意識の醸成につながると考える。

また、市内、県内の博物館をはじめ、自治会や地域の諸団体、企業、研究機関、教育機関、他市町の関係機関等多様な主体が連携・協働を図るとともに、団体の活動を支援することにより、地域資源の保全・保存と活用を両立できるよう、森の文化博物館が目指す博物館像としてふさわしい持続可能な管理運営を行っていく。

なお、活動拠点の管理運営に関しては、第2部活動拠点計画で示している。

2 運営内容

地域住民や多様な主体と連携・協力し、森の文化博物館のソフト・ハード両面で基盤整備を行う。

また、東近江市100年の森づくりビジョンの取組や東近江市エコツーリズム推進全体構想等の推進と連携して、持続的な管理運営を図る。